

Fourier 積分作用素のあるクラスについて.

千葉経済短大.

浅田 健嗣

§ 1. はじめに.

次の形の積分作用素 — Fourier 積分作用素 — を考えよう.

$$(1.1) \quad Af(x) = (2\pi)^{-n} \int_{\mathbb{R}^n} e^{iS(x,\xi)} a(x,\xi) \hat{f}(\xi) d\xi,$$

ここで,  $\hat{f}$  は  $f$  の Fourier 変換:  $\hat{f}(\xi) = \int_{\mathbb{R}^n} e^{-i\gamma \cdot \xi} f(\gamma) d\gamma$ .  $\mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$  の上の関数  $S(x,\xi)$ ,  $a(x,\xi)$  はそれぞれ  $A$  の phase 関数, symbol 関数とよばれる. (cf. Eskin [6], Hörmander [10].)

$S(x,\xi) = x \cdot \xi = \sum_{j=1}^n x_j \xi_j$  のとき,  $A$  は擬微分作用素になる.

Beals-Fefferman [2, 3] 等の研究により, 擬微分作用素については極めて広い symbol の class に対して  $L^2$  有界性定理が証明されている. この note においては, symbol 関数を Beals-Fefferman class にとり, それに対応して phase 関数も一般にしたときの Fourier 積分作用素  $A$  に対する  $L^2$  有界性定理を考察する. この定理は擬微分作用素に対する Beals-Fefferman の  $L^2$  有界性定理と Fourier 積分作用素に対しての, Fujiwara [8], Kumano-go [12] の  $L^2$  有界性定

理を含むものである。

記号 :  $\mathcal{R}^n$  の点  $x = (x_1, \dots, x_n)$ ,  $\xi = (\xi_1, \dots, \xi_n)$  に対して,

$$|x| = (x_1^2 + \dots + x_n^2)^{1/2}, \quad x \cdot \xi = x_1 \xi_1 + \dots + x_n \xi_n.$$

多重指数  $\alpha = (\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  ( $\alpha_j \geq 0$  整数) に対して,  $|\alpha| = \alpha_1 + \dots + \alpha_n$ .

$x$  についての微分  $\partial_x^\alpha = \left(\frac{\partial}{\partial x_1}\right)^{\alpha_1} \dots \left(\frac{\partial}{\partial x_n}\right)^{\alpha_n}$ .

$\| \cdot \|$  : 関数  $f$  に対して,  $\|f\| = \left(\int |f(x)|^2 dx\right)^{1/2}$  :  $f$  の  $L^2$  ノルム.

作用素  $A$  に対して,  $\|A\|$  は  $A$  の  $L^2(\mathcal{R}^n)$  空間での作用素ノルム.

$C$  : 定数  $C$  は添字が明示されていなければ, それ以前に定義された定数及び  $n$  にのみよる正の定数 (適当な).

§ 2.

定義 2.1 (cf. Beals [3], Hörmander [11]).  $\mathcal{R}^n \times \mathcal{R}^n$  上で定義された正值関数  $\Phi, \varphi$  が次の条件をみたすとき,  $\Phi, \varphi$  を weight 関数と呼ぶ:

$$(2.1) \left\{ \begin{array}{l} \text{(i)} \quad \Phi \geq c_1, \quad \varphi \leq C_2, \quad \Phi \varphi \geq c_3. \\ \text{(ii)} \quad \left. \begin{array}{l} |x-y| \leq r_0 \varphi(y, \eta) \\ |\xi-\eta| \leq r_0 \Phi(y, \eta) \end{array} \right\} \Rightarrow \Phi(x, \xi) \approx \Phi(y, \eta), \quad \varphi(x, \xi) \approx \varphi(y, \eta). \\ \text{(iii)} \quad \frac{\Phi(x, \xi)}{\Phi(y, \eta)} + \frac{\varphi(x, \xi)}{\varphi(y, \eta)} \leq C_4 \left( 1 + \Phi(y, \eta) |x-y| + \varphi(y, \eta) |\xi-\eta| \right)^N. \end{array} \right.$$

(  $A \approx B \Leftrightarrow$  ある正数  $C$  が存在して,  $C^{-1} \leq A/B \leq C$  ).

ここで,  $c_1, C_2, c_3, C_4, r_0$  は正の定数,  $N$  は非負の定数.

$\varphi(x, \xi), \Phi(x, \xi)$  は  $(x, \xi)$  における,  $x$ -空間,  $\xi$ -空間の長さをはかる尺度を表わしている.  $(x, \xi)$  の近傍  $U_{(x, \xi)}^{\varphi, \Phi}(r) = \left\{ (x, \xi) \mid |x - y| \leq r\varphi(x, \xi), | \xi - \eta | \leq r\Phi(x, \xi) \right\}$  を考えれば, 条件 (ii) は,  $U_{(x, \xi)}^{\varphi, \Phi}(r)$  上において,  $\varphi, \Phi$  はそれぞれ同じ程度の大きさであることを示している. Hörmander [1] のことばでいえば,  $\mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$  上のリーマン計量  $g_{(x, \xi)}(x, \xi) = \frac{|x|^2}{\varphi(x, \xi)^2} + \frac{|\xi|^2}{\Phi(x, \xi)^2}$  が, 条件 (ii) は slowly varying, 条件 (iii) は  $\sigma$ -temperate であるということに相当する.

以下において, weight function  $\varphi, \Phi$  をひとつ固定して考える.

<仮定>

(A-1)  $a(x, \xi) \in S_{\varphi, \Phi}^{0,0}$ , すなわち, 任意の非負整数  $k$  に対して, 次で定義される  $a$  のセミノルム  $|a|_k$  が有限の値である.

$$|a|_k = \max_{|\alpha + \beta| \leq k} \sup_{(x, \xi) \in \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n} \left| \partial_x^\alpha \partial_\xi^\beta a(x, \xi) \right| \cdot \varphi(x, \xi)^{|\alpha|} \Phi(x, \xi)^{|\beta|}.$$

(A-2) phase 関数  $S(x, \xi)$  の実部  $S_R(x, \xi)$  が次の評価をみたす.

$$\inf_{(x, \xi) \in \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n} \left| \det \left[ \partial_{x_j} \partial_{\xi_k} S_R(x, \xi) \right] \right| \geq \delta_0 > 0.$$

(A-3)  $|\alpha + \beta| \geq 2$  なる任意の多重指数  $\alpha, \beta$  に対して, 次の不等式をみたす正定数  $C_{\alpha, \beta}$  が存在する.

$$\left| \partial_x^\alpha \partial_\xi^\beta S(x, \xi) \right| \leq C_{\alpha, \beta} \varphi(x, \xi)^{1-|\alpha|} \Phi(x, \xi)^{1-|\beta|}$$

(A-4) phase 関数  $S(x, \xi)$  の虚部  $S_I(x, \xi)$  は非負:  $S_I(x, \xi) \geq 0$ .

そのとき、条件(A-1)と(A-4)から次のことがわかる：(1.1)の積分は、少なくとも急減少な関数  $f \in \mathcal{S}(\mathbb{R}^m)$  に対して絶対収束する。

定理  $a(x, \xi), S(x, \xi)$  を仮定(A-1)~(A-4)をみたす  $C^\infty$  関数とする。そのとき、次の評価が成立するような正定数  $C$  と正整数  $m$  が存在する：任意の  $f \in \mathcal{S}(\mathbb{R}^m)$  に対して、

$$\|Af\| \leq C |a|_m \|f\|,$$

ここに、 $m$  は  $m > 4m(1+N)$  なる整数、 $C$  は  $a$  と  $f$  に依らない正定数。

注意1.  $S$  が実数値関数、もしくは、さらにその虚部  $S_I$  が次の条件(A-3')をみたすとき、定理の  $m$  は  $m > 2m(1+N)$  なる整数ととれる。(  $S_R$  は(A-3)をみたしていい)。

$$(A-3') \quad |\partial_x^\alpha \partial_\xi^\beta S_I(x, \xi)| \leq C_{\alpha, \beta} \varphi(x, \xi)^{-|\alpha|} \Phi(x, \xi)^{-|\beta|}$$

なる不等式が、 $|\alpha| + |\beta| \geq 2$  なる任意の多重指数  $\alpha, \beta$  に対して成立する。

例1.  $\Phi = (1+|\xi|)^p, \varphi = (1+|\xi|)^{-\delta}, 0 \leq \delta \leq p \leq 1, \delta < 1$  のとき。

symbol関数のclass:  $S_{\Phi, \varphi}^{0,0} = S_{p, \delta}^0$  (Hörmander)

このとき、 $0 \leq \delta \leq p \leq 1, \delta < 1$  なる  $p, \delta$  のあらゆるとり方に対して共通する phase 関数  $S(x, \xi)$  のclassは次のとおり：

$$\begin{cases} |\det[\partial_{x_j} \partial_{\xi_k} S_R(x, \xi)]| \geq \delta_0 > 0, \\ |\alpha| + |\beta| \geq 2 \Rightarrow \exists C_{\alpha, \beta} \text{ st. } |\partial_x^\alpha \partial_\xi^\beta S(x, \xi)| \leq C_{\alpha, \beta} (1+|\xi|)^{1-|\beta|} \end{cases}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} S_I(x, \xi) \geq 0 \end{array} \right.$$

Fujiwara [8], Kumano-go [12] は  $\xi$  のような phase 関数  $S(x, \xi)$  ( $\xi < \infty$  は  $\xi$  に近い条件) に対して, Fourier 積分作用素の  $L^2$  有界性を証明している.

例 2.  $\Phi = \varphi = 1$  のとき. 作用素 (1.1) は Fujiwara [11], Asada-Fujiwara [1] の振動積分変換になる. Fujiwara [9] は, Schrödinger 作用素の基本解の構成の際に振動積分作用素を用いた.

例 3. Danilov [5] は, 条件 (A-1) の代わりに,  $e^{-S_I} a \in S_{p,p}^0$  という条件の下で, 作用素  $A$  を考えている. すなわち, real phase 関数の Fourier 積分作用素または振動積分変換の  $L^2$  有界性定理に帰着させて,  $A$  を考察している.

例 4. 次の条件をみたす  $C^\infty$  関数  $\lambda(\xi)$  に対して,  $\Phi(x, \xi) = \lambda(\xi)$ ,  $\varphi(x, \xi) = \lambda(\xi)^{-1}$  とおけば,  $\Phi, \varphi$  は weight 関数  $a$  に対して成り立つ.

$$(i) \quad |\xi| \approx |\eta| \Rightarrow \lambda(\xi) \approx \lambda(\eta)$$

$$(ii) \quad 1 \leq \lambda(\xi) \leq C_3 \langle \xi \rangle^{1-\varepsilon}, \quad 0 < \varepsilon \leq 1, \quad C_3 > 0$$

$$(iii) \quad \text{任意の多重指数 } \alpha \text{ に対して, } |\partial_\xi^\alpha \lambda(\xi)| \leq C_\alpha \lambda(\xi) (1+|\xi|)^{-|\alpha|}.$$

$$\left( \text{このとき, (iv) } |\xi - \eta| \leq C_4 \lambda(\xi) \Rightarrow \lambda(\xi) \approx \lambda(\eta) \text{ が成立する} \right).$$

$$\text{例 5. } \Phi = (1 + |x|^2 + |\xi|^2)^{1/2}, \quad \varphi = 1$$

## §3. 定理の証明—概略

Plancherel の定理により, 作用素 (1.1) が  $L^2$  有界 であり には, 次の積分作用素 — これを  $A$  とかく — が  $L^2$  有界 であることを示せばよい.

$$(3.1) \quad u(\xi) \longmapsto \int_{\mathbb{R}^n} e^{iS(x,\xi)} a(x,\xi) u(\xi) d\xi.$$

証明は, 以下で述べる 単位 の分解 (補題 3.1) を用い, [1, 7] の方法になら, て行なう. その基本となるのは, Calderón-Vaillancourt [4] によ, て定式化された Cotler-Knapp-Stein の補題である.

単調非増加な,  $\mathbb{R}^1$  上の  $C^\infty$  関数  $\psi$  で,  $\psi(t)=1$  ( $t \leq R'$ ),  $\psi(t)=0$  ( $R \leq t$ )  $0 < R' < R < \frac{1}{4}T_0$  なるものをとり, 次のように  $\psi_{(\lambda,\sigma)}(x,\xi)$  を定める.

$$\psi_{(\lambda,\sigma)}(x,\xi) = \frac{\psi(\lambda(\lambda,\sigma)|x-\sigma|) \psi(\lambda(\lambda,\sigma)^{-1}|\xi-\sigma|)}{\iint \psi(\lambda(\lambda,\sigma)|x-\sigma|) \psi(\lambda(\lambda,\sigma)^{-1}|\xi-\sigma|) ds d\sigma},$$

ここに,  $\lambda(\lambda,\sigma) = \sqrt{\Phi(\lambda,\sigma) / \varphi(\lambda,\sigma)}$ ,  $(x,\xi), (\lambda,\sigma) \in \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$ .

補題 3.1. 1) 各  $\psi_{(\lambda,\sigma)}$  の support は次の集合  $U_{(\lambda,\sigma)}(R)$  に含まれる.

$$U_{(\lambda,\sigma)}(R) = \{(x,\xi); |x-\sigma| \leq R \lambda(\lambda,\sigma)^{-1}, |\xi-\sigma| \leq R \lambda(\lambda,\sigma)\}$$

2)  $\psi_{(\lambda,\sigma)} \in S_{\Phi,\varphi}^{0,0}$ , すなわち, 任意の正整数  $m$  に対して正定数  $C_m$  が存在して,  $|\psi_{(\lambda,\sigma)}|_m \leq C_m$  が成り立つ.

3) 任意の  $(x,\xi) \in \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$  に対して,  $\iint \psi_{(\lambda,\sigma)}(x,\xi) ds d\sigma = 1$ .

注意 1. この単位 の分解は Hörmander [1] のそれにならった.

Hörmander のは, discrete parameter. ここのは 連続 パラメータ  $(\lambda,\sigma)$  となっている.

注意 2. §2 の注意 1 を証明するのには、上記の単位の分解では不十分。次のように変更する。

$$\psi'_{(\lambda, \sigma)}(x, \xi) = \frac{\psi(\varphi(\lambda, \sigma)^{-1} |x - \lambda|) \psi(\Phi(\lambda, \sigma)^{-1} |\xi - \sigma|) \varphi(\lambda, \sigma)^{-n} \Phi(\lambda, \sigma)^{-n}}{\iint \psi(\varphi(\lambda, \sigma)^{-1} |x - \lambda|) \psi(\Phi(\lambda, \sigma)^{-1} |\xi - \sigma|) \varphi(\lambda, \sigma)^{-n} \Phi(\lambda, \sigma)^{-n} d\lambda d\sigma}.$$

さて、 $p = (\lambda, \sigma) \in \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$  に対して、 $a_p(x, \xi) = a(x, \xi) \psi_p(x, \xi)$  とおき、 $a_p$  を symbol 関数とする積分作用素を次で定義する。

$$(3.2) \quad A_p u(x) = \int_{\mathbb{R}^n} e^{iS(x, \xi)} a_p(x, \xi) u(\xi) d\xi.$$

そのとき、次の命題が成り立つ。

命題 3.2.  $u(\xi) \in C_0^\infty(\mathbb{R}^n)$  とする。

- 1)  $A_p u(x) \in C_0^\infty(\mathbb{R}^n)$
- 2)  $\|A_p u\| \leq C \|u\|$ , ここで定数  $C$  は  $p = (\lambda, \sigma)$  に依らず。
- 3)  $Au(x) = \lim_{j \rightarrow \infty} \iint_{|\lambda| + |\sigma| \leq j} A_{(\lambda, \sigma)} u(x) d\lambda d\sigma$ ,  
ここで、極限值は各  $x$  に対して存在し、かつその収束は  $L^2(\mathbb{R}^n)$  の strong topology に関しても成り立つ。

それ故、作用素  $A$  が  $L^2$  有界であるには、次の命題を証明すればよい。

命題 3.3. 任意の compact 集合  $K \subset \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n$  に対して、次の評価が成り立つ。

$$(3.3) \quad \left\| \int_K A_p u(x) dp \right\| \leq M \|u\|, \quad u \in C_0^\infty(\mathbb{R}^n),$$

ここに、定数  $M$  は  $K$  と  $u$  のとり方に依らずの正数。

命題 3.3 の証明は次の補題による (cf. Calderón-Vaillancourt [4]).

補題 3.4. 次の条件をみたす  $\mathbb{R}^{2n} \times \mathbb{R}^{2n}$  上の正値関数  $k(p, p')$

$k(p, p')$  が存在すると仮定.

$$\|A_p A_{p'}^*\| \leq k(p, p')^2, \quad \|A_p^* A_{p'}\| \leq k(p, p')^2$$

$$\int_{\mathbb{R}^{2n}} k(p, p') dp \leq M, \quad \int_{\mathbb{R}^{2n}} k(p, p') dp' \leq M.$$

そのとき, 命題 3.3 の証法 (3.3) が同じ定数  $M$  で成り立つ.

以下, 命題 3.3 の証明のあらすじ. (3.2) の作用素  $A_p$  が補題 3.4 の条件をみたすことを証明しよう.  $A_{p'}$  の adjoint operator  $A_{p'}^*$  は次で与えられる.

$$A_{p'}^* v(\xi) = \int_{\mathbb{R}^n} e^{-i \overline{S(y, \xi)}} \overline{a_{p'}(y, \xi)} v(y) dy.$$

したがって,  $A_p A_{p'}^*$  の積分核  $H_{p, p'}(x, y)$  は

$$(3.4) \quad H_{p, p'}(x, y) = \int_{\mathbb{R}^n} e^{i[S(x, \xi) - \overline{S(y, \xi)}]} a_p(x, \xi) \overline{a_{p'}(y, \xi)} d\xi.$$

となる. 次に定義される order 1 の微分作用素  $L$  を導入する.

$$L = \rho^{-2} \left( 1 - i \min \{ \lambda(p), \lambda(p') \}^2 \nabla_{\xi} (\overline{S(x, \xi)} - S(y, \xi)) \cdot \nabla_{\xi} \right)$$

ここに,

$$\rho = \left( 1 + \min \{ \lambda(p), \lambda(p') \}^2 | \nabla_{\xi} (S(x, \xi) - \overline{S(y, \xi)}) |^2 \right)^{1/2}.$$

$$L(e^{i(S(x, \xi) - \overline{S(y, \xi)})}) = e^{i(S(x, \xi) - \overline{S(y, \xi)})}$$

であるから, 部分積分を繰り返すことにより, (3.4) の左辺を次のように書きかえる.



$$(3.5) \quad H_{p,p'}(x,y) = \int_{\mathbb{R}^n} e^{i(S(x,\xi) - \overline{S(y,\xi)})} ({}^tL)^m (a_p \bar{a}_{p'}) d\xi, \quad m=0,1,2,\dots$$

ここに,  ${}^tL$  は  $L$  の formal transposed operator. (3.5) を評価するための補題を二つ述べる.

補題 3.5. (cf. [1, Lemma 2.5])  $|({}^tL)^m (a_p \bar{a}_{p'})| \leq C_m \rho^{-m}, m=0,1,2,\dots$

補題 3.6. (cf. [1, Lemma 2.1]) 次の不等式が成立するよう  $\tau$  の正の定数  $\delta_1$  が存在する.

$$|\nabla_{\xi} (S_R(x,\xi) - S_R(y,\xi))| \geq \delta_1 |x-y|.$$

そのとき, (3.5) を support の位置に注意して評価する.

補題 3.7.  $m$  を任意の非負整数とする. そのとき, 次の不等式が成立する.

$$|H_{p,p'}(x,y)| \leq C |a|_m^2 \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{\lambda(p) + \lambda(p')} \right) \chi_R \left( \frac{x - \delta}{\lambda(p)^{-1}} \right) \chi_R \left( \frac{y - \delta'}{\lambda(p')^{-1}} \right) \times \\ \times \frac{\min\{\lambda(p), \lambda(p')\}^m}{(1 + \min\{\lambda(p), \lambda(p')\}^2 |x-y|^2)^{m/2}}.$$

ここに,  $\chi_R$  は半径  $R$  の球体  $\{x; |x| \leq R\}$  の特性関数を表わす.

Schur の補題を適用し, 補題 3.7 の評価式から  $\|A_p A_{p'}^*\|$  の評価を得る.

補題 3.8. 1)  $|\sigma - \sigma'| \geq R(\lambda(p) + \lambda(p'))$  の場合,  $A_p A_{p'}^* = 0$ .  
2)  $|\sigma - \sigma'| \leq 2R(\lambda(p) + \lambda(p'))$  の場合,

$$(i) \quad |\sigma - \sigma'| \leq 2R(\lambda(p)^{-1} + \lambda(p')^{-1}) \quad \text{ならば, } \|A_p A_{p'}^*\| \leq C |a|_m^2.$$

$$(ii) \quad 2R(\lambda(p)^{-1} + \lambda(p')^{-1}) \leq |\sigma - \sigma'| \leq 2R(\varphi(p) + \varphi(p')) \quad \text{ならば,}$$

$$\|A_p A_{p'}^*\| \leq C |a|_m^2 (1 + \min\{\lambda(p), \lambda(p')\}^2 |\sigma - \sigma'|^2)^{-m/2}.$$

$$(iii) \quad 2R(\varphi(p) + \varphi(p')) \leq |\sigma - \sigma'| \quad \text{ならば,}$$

$$\|A_p A_{p'}^*\| \leq C |a|_m^2 (1 + \min\{\Phi(p), \Phi(p')\} |\sigma - \sigma'|)^{-m/2}.$$

今、次のように正值関数  $h_1, h_2, h_3, h$  を定義する。

$$h_1(p, p') = C |a|_m \chi_R\left(\frac{\sigma - \sigma'}{\lambda(p) + \lambda(p')}\right) \chi_R\left(\frac{\sigma - \sigma'}{2(\lambda(p)^{-1} + \lambda(p')^{-1})}\right)$$

$$h_2(p, p') = C |a|_m \chi_R\left(\frac{\sigma - \sigma'}{\lambda(p) + \lambda(p')}\right) (1 + \min\{\lambda(p), \lambda(p')\}^2 |\sigma - \sigma'|^2)^{-m/4}$$

$$h_3(p, p') = C |a|_m \chi_R\left(\frac{\sigma - \sigma'}{\lambda(p) + \lambda(p')}\right) (1 + \min\{\Phi(p), \Phi(p')\} |\sigma - \sigma'|)^{-m/4}$$

$$h(p, p') = h_1(p, p') + h_2(p, p') + h_3(p, p').$$

このとき、補題 3.8 より、

$$\|A_p A_{p'}^*\| \leq h_1^2 + h_2^2 + h_3^2 \leq (h_1 + h_2 + h_3)^2 = h(p, p')^2.$$

したがって、次に示すべきことは次の評価式がなりたつ事。

$$\int_{\mathbb{R}^{2n}} h_i(p, p') dp \leq M \quad i=1, 2, 3.$$

まず、 $h_1, h_2$  の support に於いて、 $\Phi(p) \approx \Phi(p'), \varphi(p) \approx \varphi(p')$  であることに注意する。よって、 $\lambda(p) \approx \lambda(p')$ 。このとき、

$$h_1(p, p') \leq C |a|_m \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{C \lambda(p')} \right) \chi_R \left( \frac{\lambda - \lambda'}{C \lambda(p')^{-1}} \right)$$

加わり立つから,  $\int h_1(p, p') dp \leq C |a|_m$ .

また,

$$h_2(p, p') \leq C |a|_m \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{C \lambda(p')} \right) (1 + C \lambda(p')^2 |\lambda - \lambda'|^2)^{-m/4}$$

故,

$$\begin{aligned} \int h_2(p, p') dp &\leq C |a|_m \int \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{C \lambda(p')} \right) d\sigma \int \frac{d\lambda}{(1 + C \lambda(p')^2 |\lambda - \lambda'|^2)^{m/4}} \\ &\leq C |a|_m \int_{\mathbb{R}^n} \frac{d\lambda''}{(1 + |\lambda''|^2)^{m/4}} \end{aligned}$$

$m > 2n$  ならば, 右辺の積分は収束し,  $p'$  に依らずである.

次に,  $\int h_3(p, p') dp$  について考えよう.

$$\int h_3(p, p') dp = \int_{\Phi(p) \leq \Phi(p')} + \int_{\Phi(p) \geq \Phi(p')} \equiv I_1 + I_2$$

と積分領域を二つに分ける.

$I_1$  の integrand の support において,  $\Phi(\lambda', \sigma) \approx \Phi(\lambda, \sigma)$  に注意する.

また, (2.7) の (iii) より,

$$\Phi(\lambda', \sigma) \leq C \Phi(\lambda, \sigma) (1 + \Phi(\lambda, \sigma) |\lambda - \lambda'|)^N$$

加わり立つ. (  $\lambda \in p''$ ,  $\tau$  )

$$1 + \Phi(\lambda', \sigma) |\lambda - \lambda'| \leq C (1 + \Phi(\lambda', \sigma) |\lambda - \lambda'|)$$

$$\leq C (1 + \Phi(\lambda, \sigma) |\lambda - \lambda'|)^{N+1}$$

よって,

$$\begin{aligned}
I_1 &\leq C |a|_m \times \int \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{2\Phi(p')} \right) (1 + \Phi(s, \sigma) |s - s'|)^{-m/4} ds d\sigma \\
&\leq C |a|_m \times \int \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{2\Phi(s', \sigma')} \right) (1 + \Phi(s', \sigma') |s - s'|)^{-m/4(N+1)} ds d\sigma \\
&\leq C |a|_m \cdot \int_{\mathbb{R}^n} (1 + |s''|)^{-m/4(N+1)} ds''
\end{aligned}$$

これは,  $m > 4n(N+1)$  のとき, 有限で  $p'$  に依らない.

次に,  $I_2$  の integrand の support におうては,  $\Phi(s, \sigma) \approx \Phi(s', \sigma)$ .

また, (2.1) a (iii) より,

$$\Phi(s, \sigma') \leq C \Phi(s', \sigma') (1 + \Phi(s', \sigma') |s - s'|)^N.$$

よって,

$$\begin{aligned}
I_2 &\leq C |a|_m \int \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{2\Phi(p)} \right) (1 + \Phi(p) |s - s'|)^{-m/4} ds d\sigma \\
&\leq C |a|_m \int \frac{ds}{(1 + \Phi(s', \sigma') |s - s'|)^{m/4}} \int \chi_R \left( \frac{\sigma - \sigma'}{C\Phi(s, \sigma')} \right) d\sigma \\
&= C |a|_m \int \frac{\Phi(s, \sigma')^m}{(1 + \Phi(s', \sigma') |s - s'|)^{m/4}} ds \\
&\leq C |a|_m \int \frac{\Phi(s', \sigma')^m}{(1 + \Phi(s', \sigma') |s - s'|)^{\frac{m}{4} - Nm}} ds \\
&= C |a|_m \int_{\mathbb{R}^n} \frac{ds''}{(1 + |s''|)^{\frac{m}{4} - Nm}}
\end{aligned}$$

$\frac{m}{4} - Nm > n$  となる,  $m > 4n(1+N)$  ならば, 右辺は

収束し,  $p'$  に依らない定数. (だから,  $m > 4n(1+N)$  ならば,

$$\int h_3(p, p') dp \leq C |a|_m.$$

$\|A_p^* A_p\|$  の評価についても、同様に行なうことができる。  
 (したがって、命題 3.3 の評価 (3.3) が  $M = C|a|_m$  ( $m > 4n(1+N)$ )  
 で成り立つことがわかる。

## References

- [1] Asada, K. - Fujiwara, D., On some oscillatory integral transformations in  $L^2(\mathbb{R}^n)$ . Japanese J. Math. vol. 4, 299-361 (1978).
- [2] Beals, R. - Fefferman, C., Spatially inhomogeneous pseudodifferential operators, I. Comm. Pure Appl. Math. vol. 27, 1-24 (1974).
- [3] Beals, R., A general calculus of pseudodifferential operators. Duke Math. J. vol 42, 1-42 (1975).
- [4] Calderón, A.P. - Vaillancourt, R., A class of bounded pseudo-differential operators. Proc. Nat. Acad. Sci. USA. vol. 69, 1185-1187 (1972).
- [5] Danilov, V.G., Estimates for pseudodifferential canonical operators with complex phases. Dokl. Akad. Nauk SSSR vol. 224, 800-804 (1979) (in Russian).
- [6] Eskin, G.I., The Cauchy problem for hyperbolic system in convolutions. Math. USSR Sb. vol. 3, 243-277 (1967).
- [7] Fujiwara, D., On the boundedness of integral transformations with highly oscillatory kernels. Proc. Japan Acad. vol. 51, 96-99 (1975).

- [8] -----, A global version of Eskin's theorem.  
J. Fac. Sci. Univ. Tokyo Sec. IA, vol. 24, 327-340  
(1977).
- [9] -----, A construction of the fundamental solution  
for Schrödinger equation. J. d'Analyse Math. vol. 35,  
41-96 (1979).
- [10] Hörmander, L., Fourier integral operators, I. Acta Math.  
vol. 127, 79-183 (1971).
- [11] -----, The Weyl calculus of pseudo-differential  
operators. Comm. Pure Appl. Math. vol. 32, 359-443  
(1979).
- [12] Kumano-go, H., A calculus of Fourier integral operators  
on  $\mathbb{R}^n$  and the fundamental solution for an operator of  
hyperbolic type. Comm. in Partial Differential Equations.  
vol. 1, 1-44 (1976).